

## 「万葉集の比較文学的研究」

賀古明

「万葉集の比較文学的研究」と題された、中西進氏の研究は、万葉集研究史上の、今日における、劃期的な業績として注目すべきであり、その大著たる意義については、既に、高木市之助博士の書評（国語と国文学・昭和三十八年六月号）に尽されており、更に、評言を重ねる要もないほどであろう。

ともかくも、日本の古代文学、特に、記・紀・万葉集と、中国文学との影響関係に関しては、既に多くの先人によつて注目され、その研究業績も積まれて来ている。それらは、きわめて貴重な個々の研究業績であつたことはいふまでもない。しかし、これが、日本の古代文学研究において、体系的に取りあげられるに至つたのは、小島憲之博士と神田秀夫氏との業績とを以て初めとするといつても必ずしも言いすぎではないであらう。中西氏の本著の研究が、この両氏の研究に、その端緒において先じているものか、それに次いでいるものかは、これを明らかにしていかない。また、小島・神田両氏と中西氏との学的洞察力のいづれがより秀れているかといふことを問題としようとは思わない。ただ、業績の学界への発表において、中西氏は、小島・神田両氏に次いで現われていることは大様に於いて誤りはないと思う。その故に、中西氏の業績は、小島・神田両氏の業績に次位するものであるといおうとしているものでもなく、

その逆であるとも、いずれとも、今、いおうとしているものでもない。ただ、小島博士の研究に見られる緻密な読破力とその慎重さ、神田氏の研究に見る構想力の巾広さ、深さを、中西氏の研究が併せ有する点、特に、それが意識的に意欲され、きわめて積極的に押し進められて来ていることに、この大著の誕生の原動力があるとするのは、また必ずしも失当ではないと考える。しかし、この本書が、このような大著である故に、かえつて「瑕瑾」と称すべきものが案外に見出される点を少しとしないことは研究上の一つの宿命であらう。それらは、この著者自身によつて、この著書の印行中に、更に発刊後に、既に、補足・充実され、将来に向つてもなされ、より完璧のものとなされる期待は十分に考え得ることである。

今は、その「瑕瑾」を問題とするよりも、むしろ、この著述によつて提示されている、万葉集研究の、一つの劃期的な業績を、より正確に理解し、賛否の諸点はともかくとして、万葉集研究の将来に生かすべく、読みとることが先決の一問題であらう。

この場合、研究業績の著書は、当然、他の研究者一般にできるだけ広く多く読み通されねばならないものである故に、著書刊行において、そのことは、当然、考慮されねばならなかつたことである。しかし、著者の研究のスケールの大きさと、そのきわめて積極的な

熱情的な発表意欲は、そのような考慮を乗り越えて（それは勿論、無視してのことではないことはいうまでもないことであろうが）、本文、三十一章・千二十頁と詳細な諸索引六十頁を一冊の本に盛り込み、学界に提示するという形をとっている。そして、それは、まことに、みごとな偉大な著書としての姿を整えあげている。

しかし、この偉大な著書の姿体が、読む側の者、読者一般にとつては、驚るべき圧力として、それを読む以前に感じられ、更に、それが一読すべき書であると知つた者にとつては、それを暇々にぼつぎれに読むことをさげ、完読一過の時を予期することのために、本著の真価が正当に享受されないで、時日が徒に経過し去る恐れが多分にあり得ることはまことに惜しむべきことであろう。事実・評者自身も、発刊時に、この著書を手しながら、その実、この書評（といひ得るものであるかは別問題としても）の執筆を担当せしめられることになつた時から略々一カ月の経過後、書評原稿下書に着手する約半月前まで、全くこの著書を前にして読むことをしていなかつた次第である。このような怠慢は、評者自身のことであり、いらざる「告白」にすぎないものであつて、他の人々にとつてはそのとおりであつてくれなければよいと考えることである。ただ、評者自身のこの「怠慢」は、この著書発刊以前において、既に、多くの機会に、同氏の研究発表の大半を聞くを得ており、学界誌発表論考の大部分を読むことを得、更に、それらに関して、中西氏に問いただし、反論し、論駁されて納得したり、将来に問題を残したりする機会を持ち得ていたことによる点もあつたことではあるが。

しかし、今度、書評のためとして、完読一過を主眼として、読み切つた今、かつて、個々に聞き、読んだ研究成果によつて享け取つたものとは較べものにならない一貫した構想の大きさと、研究の着

実さ、更に研究将来への見通し、見解の自信に充ちた確かさを（賛否の点の有無を別問題として）深く感得・享受するものがあつた。

この故に、特に、このような、一貫した学的構想によつて書き買かれていた一書は、なんとしても、完読されることによつてのみ、本著の真価が把握され、享受され、また妥当な評価がなされ、批判が前進的姿勢においてなされ得るのである感を深くした。

このためには、前記の、高木市之助博士の書評、更に、比較文学研究における偉大な先人としての土井光知博士の、周到な書評（文学・一九六三・十月号）、特に比較文学研究として、より場面的に広い学的見通しがある批判と忠言とに充ちた書評。また、著者と略々同世代の優秀な抜群の研究者であり、著者が、特に、その人の書評を期待していた一人である井手至氏の書評（万葉・第四十九号・昭和三十八年十月号）、ここには、特に、著者の研究の根幹的問題点への鋭い学的希求が示されている書評などがあり、書評としていわれるべきことの大部分が殆ど尽されているといひ得るほどであり、あえて、その上に重ね加うべきものがないともいひ得るほどである。ただ、今、評者自身としては、「書評」に近い「感想」というスタイルにおける「書評」らしきものの二・三をここに附加させてもらう余地ぐらひは残されていると思われる故に、今、しばらく筆に思いをゆだねようと思う。

その一つは、やはり、本著における根幹の問題である「比較文学的研究」方法の問題である。これに関しては、前記の三書評においても勿論、重点の問題として、何らかの形において、それぞれに触れられていることではあるが、一言だけは評者も触れざるを得ない問題点である。それは、前者の「比較文学的研究」方法に関する考え方であり、その実践における研究姿体と成果とに関わつている問

題である。三書評を通じて見られる評言は、「(著者が)比較文学とは別個に立てて対照文学と銘うつことを提唱しながら」「本論の中でも、関係を影響として比較文学的に扱っているのか、それとも類似として対照文学的に判断しているのか曖昧な場合が少なくない」(高木博士書評)とし、また「比較文学理論に対する修正意見の提出としては、やや説明不足で(とくに比較と対照との問題など、もう少しはつきりさせてほしかった)」(井出至氏書評)といわれていることであり、ともかくも一応の妥当な評言となし得ることである。しかし、これは、一応「妥当な評言」であり、忠言であり、希求であるというのであつて、中西氏の万葉集研究のための、中西氏の原著においての「比較文学的研究」方法への批判としてはやや距りの感じられるものであると思う。中西氏はきわめて謙譲に「極東古代の詩歌集たる万葉集には、ティームの卓れた、且つ基準的な理論を大幅に改めざるを得ない。その点全く私のセオリーにすぎないが、一往現在の私はこれを万葉集の比較文学の目安と考えておきたい。」と序論第一章の末に記されていることまでに含まれて来ている意見は、本論における検討実践において大部分においてきわめて注意深く、細心の記述表現によつてよく果されている。しかもなお、前記の二書評の評言が述べられる一応の適切性は、六朝・初唐の、高度な先進国文化と、それと史的併行時にあつた古代日本の低文化性との間のきわめて巨大な落差が、必然的な宿命として古代日本に負せたものを考慮の外にした一般の考察におけるものであるとい得ようか。既に中西氏が、検討実践面において幾度も注意深くことわられているように、この巨大な文化的落差の故に生じた、文化の一方的影響関係という限度までにおいての中西氏の「万葉集の比較文学的研究」においても、先記の如く峻別を希求されている「対照文学」的研究方法と見られる方法も用いられていると

一応見られる点のあることも事実である。しかし、その「対照文学」的検討手段は、決して中西氏の「比較文学的研究」方法そのものとして用いられているそのものではなく、中西氏の「比較文学的研究」を主体とし、そのより拡充への飛石的踏み石として、学的希求の伸展路線上のものとして添えられ述べられているという意義においての「対照文学」的検討手段による発見が添記されていると理解されるべきものではなからうか。しかも、その「対象文学」的検討方法の採用においても、それが単なる「対照文学」的検討のみのものでなく、その方法がその当時における史的必然性のある「時」と「場」との上に見出され得たものとしての、そして資料の発見充実の将来において、「比較文学的研究」の正当な資料となり得る可能性のより豊かなものにおいてのみ「対照文学」的検討方法によつて論述の拡充がなされ、進められてゆくことに、きわめて細心の注意と論述表記がなされている。このことは、万葉集研究の「比較文学的研究」の現段階においては、「仲介」資料の、近時における小島博士及び中西氏自身の発掘によつても、それが、総体的には、なお偏向性があり、僅少性があるということの、研究経路線上に常に伴う宿命的原因に起因することであり、小島博士の著書「上代日本文学」と中国文学上」の続巻(中・下)を主体とする研究成果の将来と共に、中西氏の将来の名著となるであろう「漢魏六朝中国と古代日本における東洋叙事詩」及び「初唐ならびに万葉集における東洋抒情詩」を命題とすると称されている研究の完成によつて、より正当に「万葉集」の「比較文学的研究」が、日本古代文学への有的な独自の研究方法の一つとして確証され得る時を期待し得る十分のものがあることであろうと考える。

中西氏はこの書を評、当評者が担当することになつた、本誌の編輯部会の席上において、中西氏と評者との個人的な近親感の故に、

書評が「八百長」的にならないようにとの希望を述べられている。そして、その希求は、評者の、書評執筆においてももつとも戒むべきこととして書評心から除去しているつもりであり、評者自身としても、このことは、常に自らにおいて自らに求めている希求である故に、それを犯しているつもりはない。

しかも一見、この書評が「仲間ぼめ」的に見られるとする場合があるとするれば、それは評者の評言の拙劣さによるものであると共に一方には、学的方法論における思惟傾斜こそ異なれ、学的希求態の同態性、又は、近似・近親性によるものとして許容願いたく考える次第であり、このことは、中西氏の本著が、そのような配慮なく、学的大著であるとすると学界評を何ら阻害するものではないと考える次第でもある。

なお、もう一言、評者としてよりも、むしろ、この著書の持つ、新鮮な、しかも、鋭利な考察と、その成果から、何らかの、というより、多くの学的栄養を摂取しようとする読者としての研究者側の者としての感想を添えておきたいと思う次第である。

「序論」の問題点については、上記したことであるので、ともかくとして、さて「二・作家論」から頁を追つて、著者の「比較文学的研究」の成果を十分に読みとつてゆこうとする場、しばしば「困惑」することは、既に、井手氏の書評にも記されているように、「別稿に」記した等として省略されている立証根拠、著者の考察根底の不明記のあることである。これは、著者自身にとつては、既に十分把握し、確保しきつていっていることである故に、度毎に今更それを詳記することの繁雑さに堪えぬことであるための省略であるとしても、読者側として、一章一章を徹底的に読みとろうとする者にとつては意外に大きな障害をなし、その立証の確かさを減少して享け取らざるを得ない結果を引き出している場合を少しとしない。しかも、この

点（この点のみからというのは、強言に過ぎるとしても）から、「序論」に対する評言としての、前記のような「比較文学的研究」と「対照文学」的研究との区分の不明確さ、特に、研究立証面においての実践としての「比較」と「対照」との適用に対する不安が指摘される結果も引き出しているとするのも必ずしも過言ではないと考える。

しからば、この大著にとつては、一応きわめて小さな「瑕瑾」とも見られるものでありながら、読者側からすれば、意外に大きく本論の理解にかかわつてゆく点を、可能なかぎり、消化して、本著の研究主意を理解し、摂取するために、いかに読むべきかの問題が残される。ここに、評者の考えを平直に提示しよう。

「序論」は、当然まず第一に読むことが必要であり、これはいうまでもないことであろう。次に、「二・作家論」へ直に入らないでまず「三・作品論」の初頭の二章、「第一章 万葉歌の誕生」「第二章 辞賦の系譜」を読むこと、これは、次の「第三章 長歌論」まで読みつがれておく方がより十分であろう。そして改めて、前にもどり、「二・作家論」から頁・章を追つて読みつがれることに、著者の研究主意の理解の十分さへのより確かな道があると考えられるのである。

このことは、この第三章に記されていることが、この大著に示されている研究の、もつとも根幹となる論であり、基底的把握として、千二十頁に及ぶ本論を貫流する血脈であるものの基本的論述部分であるとも得るものであるからである。なお、更に、これをしほれば「辞賦の系譜」の一章こそ、本論の心臓的論述であり、それは、「人麿・金村・赤人・虫麿・憶良・福麿」という長歌作家たち、そして意吉麿という作家を、辞賦の影響の中に作歌し、辞賦の流れの中に生きた作家、『辞賦の作家』であると断定してみたらどうか」と

いう設問に発し、これらの作家たちの文学的性格を「辞賦の作家」として確かに把握したことを根幹とし、更に、それらの作家たちとは異質の系列作家として黒人・旅人把えることを通して、「辞賦の作家」の系譜の衰微と断絶——「万葉の歴史の断絶」の中と後に、家持国歌の文学的性格を、「人麿を代表とする歌の世界」——「辞賦の作家」の世界を「理想と考え」ながら、それをよりよく消化し、それから脱出しようとし、脱出しつつあつたものと把握する見解に起点があるのである。その作品分析における第一立証論が、次の「長歌論」であり、それら「辞賦の作家」の出現の歴史的社会的要因を「百濟滅亡」によつて、「半島に滅んだ文華の、わが国における蘇生」に見、その「文華」を古代日本文化への影響、刺撃案として万葉歌誕生の史的地盤を見つめたことに、本著立論の根底思考が見出されるからである。

したがつて、本論は、著者が、万葉長歌の作者の文学的性格を「辞賦の作家」として把握した点を、基底的根幹とし、その学的把握の血脈に立脚しそれに添つて、遡上することによつて、「伝論作家たち」の歌の伝誦の姿体を見つめ、それらが、それぞれの伝論作家たちの歌として考えられるに至つて、その「定着」の姿体と時と場とを見きめようとしている。その結論的内実は、今、これを著者による新見とは必ずしもいい得ないとしても、その「定着」の契機と、その素因の追求に見られる著者の立論は、本論著に一貫する論旨を支えとして在来説よりは確論性の豊かなものといひ得よう。

以上に次ぐ、「第二章 雄略御製の伝誦」も第一章の「伝誦の作家たち」の性格と同系譜歌の、万葉集巻頭歌としての意義と定着との問題の究明であり、これを通して「第三章」以後に論究されている部分は、前記の「辞賦の系譜」に論述された著者の見解の、それら作品におけるより詳細な論究・立証論の再論述として読まらるべき

性格のものである。

「三・作品論」中の第四章以後、及び、「四・主題論」は、評者の見解からすれば、「三・作品論」の第一・第二・第三章に論述された著者の根幹の見解の提示、それに次ぐ「二・作家論」の十一章においてより詳細な立証論述という、本著の体系論述を、より確かにする意義において、注目的に取りあげられた、特殊な歌体・歌風・歌意の解明、及び、歌群、更に、用語の性格の究明論を、「作品論」（第四章以後）及び「主題論」に収められていると見てよいと考える。ただ、このような享け取り方は、著者の構想と、全く距りのある異見であるとすれば、早や、何をかいわんや。もし、いくらかでも、著者の構想に触れ得ているものがあつたならば、少くとも「作品論」「主題論」に収められている各章が、果して適切な分類・排置であるとするには、再考の余地があつたのではなからうか。特に「作品論」中に収められている第一章・第二章・第三章の置かれるべき場所の問題において。

以上は、あくまでも、読む者の立場において、著者の、この劃期的な万葉論を、よりよく理解しようとする希求に添つての、全く書評らしからぬ感想批評であり、本著における「論」「章」の分類排列は、著者の、この大いなる万葉論の構想に立脚して、もつとも適当なものとなされたものであらう。そして、これは本著の如き大著述の分類排列としては、まことにみごとな偉容を整え得ているといひ得ましょう。しかし、その故に、読む者の側からすれば、やはり、直ちに近接しかねる何ものが介在するの感を払拭し得ないものがある。それは、評者の前記の所由によつて正當に解明し得るものか、また、他の何ものであるか、著者のお考えをうかがいたいものでもある。

ここに評者らしくない評者の雑々多々の言辭は、一吹の息吹きに

雲散霧消するであろう如く、中西氏の、古代文学研究は、既に遙かに前進し、より充実しているであろう。将来に向つての期待は多い。

万葉集に興味を持ち、万葉集を読む者、万葉集を論じ、万葉集を研究しようとする者が、ともかくも、一度は読んでおくべき書であるとする定評は、既に、この大著に与えられている。これからの万葉集研究はいうまでもなく、古代文学すべての研究を志す者の必読の大著であることは、もう言を重ねるの要もないことである。

なお、書評ともいい得ない、この感想批評の文中に、高木市之助博士・土居光知博士・井手至氏の書評を引用し、薄識な記述のよすがとしたこと、失礼を心からおおび申し、御海容を乞うと共にこの大著に対して、さらでもの言を弄したことについては、著者、中西進氏の寛宥を得んことを願うのみである。

なお、文末に、おおけないことながら、この書評を書き終えた今テレビニュースに、くしくも、

万葉集研究の大先学

佐佐木信綱先生の 御逝去の第一報を聞く。

万葉集研究・古代歌謡研究、総じて、古代文学研究の、研究者列の末々の席に列なり、評者、ここに、頭を垂れ、遙かに、熱海西山の立石に、鎮りましし、

佐佐木信綱先生の御霊の安かれと、心から御冥福を祈り奉る。

研究に、ひたすら、御生涯を貫らぬかれたことの偉大さに、今、ひとしを感銘深く重なり、堪えず、書評の筆を擱く。

昭和三十八年十二月二日の夜。

## 上代文学

通巻第十六号

佐佐木信綱博士追悼記念号

¥二〇〇

学恩をしのぶ

高木市之助

佐佐木博士の歌学史・和歌史

久松潜一

「山田守醉書人古万葉集」について

石井庄司

桜児考

尾崎暢映

万葉集「行年」考

大久保正

万葉集卷十四と挽歌

桜井満

宮女の恋

中西進

人麿歌集の所収歌

森淳司

譬喩歌と寄物陳思歌

伊原昭

草鹿紙宣隆

井上豊

白鳥処女説話の位置と分析

大久間喜一郎

『万葉集古義』と『巧者学術』

鴻巣隼雄

琴歌譜「阿遊随扶理」攻

賀古明